

長岡あーかいぶ 第21号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室

https://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/?page_id=134

文書資料室から歴史文書館へ ～地域史研究と史料保存の経験を受け継ぐ～



▲文書資料室（坂之上町）
閲覧室（左）・書庫（右上）・正面玄関（右下）
平成10年（1998）4月、互尊文庫内に開室。25年間で、
のべ22,184人の皆様にご利用いただきました。

▲旧サンライフ長岡（長倉西町）
昭和53年（1978）11月に勤労者の余暇活動の充実と健康増進を目的に開館した建物が、歴史文書館として生まれ変わります。

長岡市立中央図書館文書資料室は、市立互尊文庫の「米百俵プレイス ミライエ長岡」への移転にあわせて、旧サンライフ長岡（令和4年3月閉館）の建物に移転します。リニューアル開館は令和5年7月1日、新しい名称は長岡市歴史文書館（ながおかしれきしぶんしょかん）です。文書資料室、そして、その前身である長岡市史編さん室の機能は、歴史文書館へと引き継がれます。

市史編さん室は、昭和61年度から平成9年度まで、旧市役所柳原分庁舎（平成29年解体）を拠点に市域の歴史文書（古文書等、歴史公文書）を調査して、『長岡市史』全8巻を刊行しました。

文書資料室は、平成10年度から令和4年度まで、互尊文庫2階の閲覧室で市史編さん室が収集・保存した歴史文書を公開するとともに、市史双書の編集や古文書解説講座などの普及活動を行ってきました。この間、中越大震災、市町村合併、新型コロナウイルス感染症といった現代的な課題とも向き合いながら、市民協働で歴史文書の保存・活用のあり方を考えてきました。

歴史文書館は、市史編さん室12年、文書資料室25年の地域史研究と史料保存の経験を受け継ぐ、長岡市のアーカイブです。1階には閲覧・展示室と講座室を中心とする利用者エリア、2・3階には歴史文書の収蔵エリアを整備。中央図書館、科学博物館、長岡戦災資料館、河井継之助記念館などの関連施設と連携して、市民の歴史学習と調査・研究を支援します。歴史文書に刻まれた郷土長岡のあゆみを「学び、伝え、究める」施設をめざして、職員一同、開館に向けた準備を進めています。

○休館のお知らせ

移転準備のため、文書資料室は下記のとおり休館中です。

ご理解のほど、よろしくお願ひします。

- 休館期間 令和5年6月30日（金）まで
- 休館中の連絡先 電話 0258-36-7832、FAX 0258-37-3754
- 事務室 〒940-0849 長岡市長倉西町458-7（旧サンライフ長岡内）

■休館中は所蔵資料の閲覧等の業務を休止します。

■郵送での刊行物の頒布はおこなっていません。

■記念行事等のリニューアル開館の詳細は、随時HP等でお知らせします。

令和4年度の文書資料室

【古文書解説講座】

5月11日・25日・6月1日、長岡市立中央図書館を会場に開催しました。このたびは初心者・経験者が同一のテキストを使用して学びました。

内容は「古文書のいろは～古志郡長倉村文書を読む」「長岡城下の孝行者～「孝義録」より」「長岡藩銃卒の出陣日誌からみた長岡城攻防戦」です。

講師は田中洋史文書資料室長、小熊よしみ中央図書館会計年度任用職員、田邊幹県立歴史博物館専門研究員が担当しました（担当順）。

全3回の講座にはのべ212名の皆様にご参加いただきました。



【長岡市史双書を読む会】

7月6日・13日、長岡市立中央図書館を会場に開催しました。

テキストは長岡市史双書No.61『蔵王権現領安禅寺御用記(7) 日並記・諸掛合留・諸願書留（文化10・11年）』です。

講義は双書の編集を担当した職員3名が講師となり、「文化年間の長岡・蔵王と「安禅寺御用記」」「日並記の天気記録を用いた気候の分析」「文化10・11年のできごと」「蔵王領中島の新田開発」というテーマで進められました。全2回の講座にはのべ81名の皆様にご参加いただきました。



😊😊😊 長岡市資料整理ボランティア 😊😊😊

互尊文庫内で行う活動も、最後となったこの一年。4月には、新潟県教育委員会主催の「いきいき県民カレッジ成果活用促進事業」に登録しました。11月には、「地域歴史文化フォーラム新潟 資料ネット・博物館・文書館と市民・学生」に職員2名が参加、「市民と取り組む資料保存—長岡市立中央図書館文書資料室の試み—」と題して、これまでの活動を報告しました。

通常の作業は、引き続き基本的な感染対策を講じて新聞資料整理・古文書整理とも予定通りそれぞれ6回実施し、移転業務のため例年より1か月早い11月に活動を終えました。前年度より参加者が増え、感染拡大以前の雰囲気に戻りつつあります。

【新聞資料整理班】

全国紙から地方版と災害に関する記事を切り抜く作業を行いました。

のべ40名が参加し、5紙68か月分を整理しました。記事をまとめた製本新聞が6冊できる予定です。



【古文書整理班】

古志郡村松村金子家文書のクリーニングと目録をとる作業を行いました。

のべ69名が参加し、高辻帳・万控帳など、横帳や横半帳を中心に約240点を整理しました。



中村仙巖尼 1849(嘉永2)～1929(昭和4)

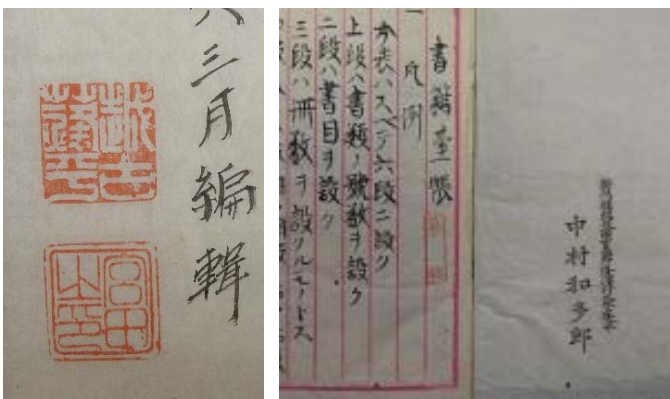


▲中村仙巖尼

中村仙巖尼(せんがんに)は、長岡女学校を創立した星野嘉保子(『長岡あーかいぶ』16号「長岡の碩学」(16)参照)とともに「長岡の女子教育の先駆者」として並び称される女性である。文書資料室は令和2年(2020)、仙巖尼の生家である古志郡蓬平村(長岡市蓬平町)の中村家の資料を受贈した。これらの整理を進めるなかで得られた情報も参考にしながら、仙巖尼という人物を紹介していきたい。

宮田堂と宮田文庫 中村家の通称は「宮田(みやだ)」である。これは屋号でも地区名でもなく、地所名(土地の名前)であるという。敷地内に6畳ほどの「離れ」があり、「宮田堂」と名付けて三百余冊の本を置き、「宮田文庫」として、明治期から昭和の初め頃まで地域住民に貸し出していた。

宮田文庫の内訳を見てみると、約半数が仏教に関する本である。江戸時代から読み継がれてきたと思われるものや、仏教書や経典の写本も多く、同家が信仰心の篤い家庭であったことがうかがえる。「中村和多郎」の押印が多いことと、本の出版年代などから、宮田文庫を創設したのは中村和多郎であると推測できる。



▲宮田文庫の蔵書印(左)と中村和多郎の押印(右)

出家、修業時代 仙巖尼は、嘉永2年(1849)に中村祐太郎の三女として生まれた。前述の和多郎は8歳上

の兄にあたる。『長岡教育史料』によれば、当時の蓬平地区は殊に仏教への信仰心の篤い土地柄であったようだ。こうした風土や家庭の影響もあったのであろう、仙巖尼は慶応2年(1866)、17歳で古志郡石内村(長岡市石内)の実相庵にて出家する。

雲洞庵(南魚沼市雲洞)を皮切りに、県内外の4つの寺で、およそ20年にわたって修行を積んだ後、実相庵に戻った。

仙巖学園の盛況 明治22年(1889)、仙巖尼は実相庵内に県の認可を受けた女学校「仙巖学園」を開校した。開校の目的は、良妻賢母となる女性を育てることであった。修業年限は3年で、学科は裁縫・修身・算術・習字・作文などの技芸や学問のほか、信仰心を養うために観音経を読ませたり、仏教唱歌を歌わせたりした。入学者は年々増加し、自庵では収容しきれなくなり、観光院町の救世院(野本恭八郎邸跡)を借りて移転。しかし、救世院返却の必要にせまられ、惜しまれつつ同28年に閉園した。

同年、仙巖尼は弟子のみをとめない「小出町信徒ノ希望ニ応シ」て北魚沼郡八箇村(魚沼市井口新田)へ移り住み、庵を結んだ(円通庵)。

尼僧学林の盛況と龍谷院 明治40年、仙巖尼は曹洞宗管長の認可を受け、円通庵に尼僧学林を設立した。学林とは、僧侶が学問をすところである。能弁家で、学科指導も布教活動も熱心に行っていた仙巖尼の評判は高まり、学林は盛況であった。大正2年(1913)には、「龍谷院」と公称する認可を得た。

昭和4年(1929)に仙巖尼が没すると、姪の中村仙恵が二代住職をつとめた。昭和27年(1952)には「龍谷院新潟専門尼僧堂」と改名する。最盛期には60～80人の尼僧が在籍し、托鉢する彼らの姿を、町中で見かけることもあったという。時代の流れや変化の影響は免れず、この地で学ぶ尼僧も次第に減少していった。現在では、写経の会や座禅の会を開催しながら、仙巖尼の教えを今に伝えている。



▲龍谷院(魚沼市)

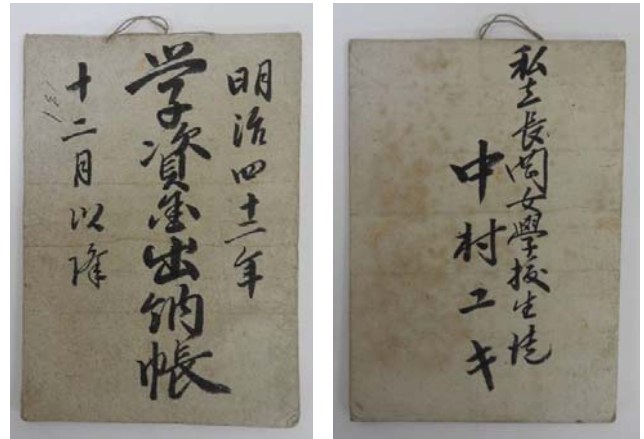
【主な参考文献】

- ・『長岡教育史料』(北越新報社、大正6年)
- ・『小出町史』下巻(平成10年)
- ・『長岡市史』通史編下巻(平成8年)
- ・『ふるさと長岡の人びと』(平成10年)

《新たに公開した所蔵資料一覧》

※保管場所の都合等で当日閲覧できない資料もあります。

- ・室橋みよし収集資料（長岡の民謡ほか）
(近代・現代、41点)
- ・刈羽郡横沢村山田家文書（近代・現代、142点）
- ・長岡藩士高野家文書（近世・近代、44点）
- ・三島郡深沢村吉野家文書（近世～現代、122点）
- ・古志郡鼠島村庄屋中村家文書追加
(近世・近代、1,396点)
(令和5年2月末日現在)



▲学資金出納帳 表紙（左）・裏表紙（右）
(古志郡鼠島村庄屋中村家文書追加)

新型コロナウイルス感染症に関する記録を収集しています

文書資料室は、令和3年度に続いて、今年度も新型コロナウイルス感染症関係資料の提供依頼を市役所各課・各施設に行いました。令和3年度は文書データ約4,000点（文書データのファイル数）、写真データ約800点（画像の枚数）を収集。収集成果の速報は、矢田俊文・中村元・文書資料室編『災害史研究とチラシ・ポスター・絵葉書の資料学』（新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、令和4年2月発行）などで行っています。目下の課題は、紙媒体とは異なるデジタルデータの整理・目録作成の方法論の構築です。令和3・4年度の収集資料は、市民と市政が向き合った感染症対策の記録として、令和5年度以降に長岡市史双書や企画展示で活用していく予定です。

長岡市史双書 No.40 『三島億二郎日記(4) 好評につき再版！ —北海道拓殖の記—』

平成13年に刊行した三島億二郎日記の翻刻史料集第4集を再版しました。本書は長岡市指定文化財「三島億二郎日記」（長岡市立中央図書館所蔵）42冊のうち、明治20年代のものを中心に収録しています。

近代長岡の復興を成し遂げ、宿願の北海道開拓事業へ三島最晩年の奔走の記録です。



頒布価格 1,500円
B5版・232ページ



▲ワクチン接種会場受付
(さいわいプラザ1階、令和3年10月23日撮影)

長岡市歴史文書館リニューアル開館までの長岡市史双書No.40（再版）の頒布については市役所なんでも窓口（アオーレ長岡東棟1F）および長岡市立中央図書館でお取り扱いしております

《編集後記》今号は、長岡市立中央図書館文書資料室の名称で発行する本紙の最終号になります。本紙の創刊は、平成17年。各号には、地域史研究と史料保存という課題に向き合った文書資料室のあゆみが刻み込まれています。本紙の続刊は引き続き歴史文書館が行います。文書資料室をこれまで支えてくださった皆様に感謝いたしますとともに、歴史文書館のこれからの取り組みにも変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。（文書資料室長）

令和5年3月31日発行 編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室 TEL 0258-36-7832 FAX 0258-37-3754
〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町3-1-20（長岡市立互尊文庫2階）※4月1日以降：〒940-0849 新潟県長岡市長倉西町458-7
E-mail: rekibun@city.nagaoka.lg.jp ※メールアドレスが変わりました。旧メールアドレスは使えませんがご注意ください。